
俺と天使？【第三章】（3）

榛名屋 忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と天使？【第三章】（3）

【Nコード】

N0875R

【作者名】

榛名屋 忍

【あらすじ】

学校の近くにしばしば現れる不審者。ターゲットは男子小中学生。ストーカー行為、通り魔的な傷害事件が続く中、ついに菅原悠里が狙われた。

「はあ、はあ…」

悠里は走り疲れていた。刃物を持った男に追われているのだ。しかも、交番を探すうち、道に迷ってしまったらしい。下校途中の出来事だった。いつもなら沙也佳と一緒に帰るのだが、その日は委員会活動があるので先に帰ってもらうことにした。そして、薄暗い帰り道を一人で歩いているときに、突然男が現れたのだ。

フラフラになりながらも走る悠里は遠くに同級生の林康太の姿を見つけた。家の前で自転車の点検をしているらしい。

「林くん、助けて」

悠里はとっさに駆け込んだ。

「菅原：なんでお前が」

「家に入れて！お願い！」

康太は訳もわからないまま、とりあえず悠里を部屋にあげることにした。

「はい、麦茶」

「ありがとう…」

「何があつたんだよ。血相変えて」

ソファに座り、康太が話しかける。

「…ナイフ持った人に追いかけられて」

青い顔をした悠里が呟く。それが狂言でないことは康太にもわかった。

「それってもしかして…先生が言ってた不審者か？」

ここ最近小中学生を狙う不審者がいるらしく、学校で注意を呼びかけているのだ。

「たぶん」

悠里は恐怖を思い出して涙目になる。

「つたく。男ならめそめそすんな！」

「あ…ごめん」

悠里が涙を拭くと、康太は目線をそらしながら話を続けた。

「悪かったよ。女男とか言っつて。お前はずつと男で通してきたんだよな」

康太は同級生と共に悠里をからかった一人だった。

「林くん…でも…」

「いいんだよ！俺は謝ったからな！」

「わ、わかった」

二人の間に妙な沈黙が流れた。しばらくして、康太が口を開いた。

「ところで、お前に忠告しておきたいんだが」

「何？」

悠里は緊張感もなく聞き返す。

「何？じゃねえよ、バカ。お前は一応女なんだろう？」

「うん」

「だったら簡単に男の家が上がってんじゃねえ！自覚しろ！」

「あ、ああ、そっか」

悠里は手をぱちんと叩いて納得した。

「なんでそんなに抜けてるんだよ。まったく」

「ごめん、ごめん」

「とりあえず不審者のことは警察に話した方がいいぜ。最近不審者マップってのもあるらしいしな」

「そうだね。林くん、ホントありがとう」

康太は悠里を見てなぜか顔を赤くした。

「お前さ、家、この辺りなのか？」

「あれ、ええと、ここどこ？」

「はあ？」

「途中から怖くて走るのに必死で…僕は方向音痴だし…」

「はあ…まったく危機管理のなってるない」

康太はあきれ返ってしまった。

「ごめん」

「ここはひまわり団地だよ」

「そっか。僕はおみじが丘なんだ」

「なら、途中までは一緒だな。必要だったら声かけるよ。家まで送ってやるから」

(後書き)

小説ランキングに参加しています。お気に召しましたら、バナーの
クリックをよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0875r/>

俺と天使？【第三章】（3）

2011年10月7日23時15分発行